

ら大いに使う使われなければ仕事ができないと言うような人たちは新しいタイプの研究所には要らない、ほっといた方が伸びる人、非常にベーシックな事を考える人、そういう年齢層が27から37までである比率では重要ではないか。

湯川： どうして中の人が基研にいる必要があるのか、外国の方が魅力がある。

鈴木増： 外国に行く方がいいと言うのであれば成功していないことになる、そういう研究所にならなくてはならない、基研も考え直す必要がある。

土岐： アイデアを非常に強調して、非常に無理をしてると言う感じがある。歳を意識するのは発想的に問題がある。

「地方」研究者と基研

高塚 龍之（岩手大人文社会）

基研の将来についての考えは人や分野による以外に大大学・中央的大学の人と「地方」大学の人とではかなりの開きがあるように思われる。このシンポジウムで「地方」からの発言をすることになったのもこの趣旨からではないかと思う。一口に「地方」大学といってもDCのある大学、MCはある大学、学部迄、一般教育のみ担当、あるいは研究機関とは云えないようなところも含み、事情は様々である。従って私の話は個人的な見解にならざるを得ないが「地方」研究者に共通する面も多くあるはずである。

1. 格調の低い話

「地方」の研究機関（ここでは研究条件に恵まれない機関を総称する）に居る研究者は多かれ少なかれ「三無（人・金・時間）と三欠（自立性・継承性・総合性）」¹⁾ に象徴される問題に悩んでいる。とりわけ研究の activity を保つ上で情報・刺激・雰囲気欠如、研究交流の困難性（呼ぶ、出かける、共同研究）は深刻である。この状況は昔から続いており、今後「格差」は更に広がろうとさえ見える。しかし暗い話ばかりではない。一昔前に較べてコンピュータ事情は格段に良くなったし、流行に追われず息の長い研究ができるという面もある。「地方」研究者の主体的努力も特筆しておきたい。MCやDCの設置、スタッフ・予算増への努力、地域での勉強会や研究会の企画、研究グループの育成、素粒子論グループ（SG）地方大学懇談会を通じての活動、等々、条件改善へのとりくみが続けられている。表1にこの1年、各地でもたれた企画をあげた。これからも「地方」研究者の主体的努力の一端

が伺い知れる。

ところで地方に居ると研究交流には旅費が不可欠である。昨今は科研費の増加もあって中央的研究機関の人々にとっては余り意識されなくなった様にも思えるが、この面でも「地方」には陽があたらない状況が続いている。図1にS G研究者を対象とした一般研究C（1980年迄はDも含む）の採択状況をあげた。全体として中央偏重の傾向が読みとれる。'74~'80では平均70%が「地方」の人にまわっていたのが'81~'89では40%に落ちている。因みにDがあった頃はその85%が「地方」であった。小口のCですらこうであるからAやBについては推して知るべしである（'86年に金沢大素粒子論研究室から中央偏重との問題提起があり一時改善かにみえたが大勢として変化していない）。科研費全体からみれば額、件数ともわずかなものであるが「地方」の人が採択される事は「地方」全体にとって大いにencouragingである事を強調しておきたい。Dのようなカテゴリーを復活させ「地方枠」があればというのが正直なところである。

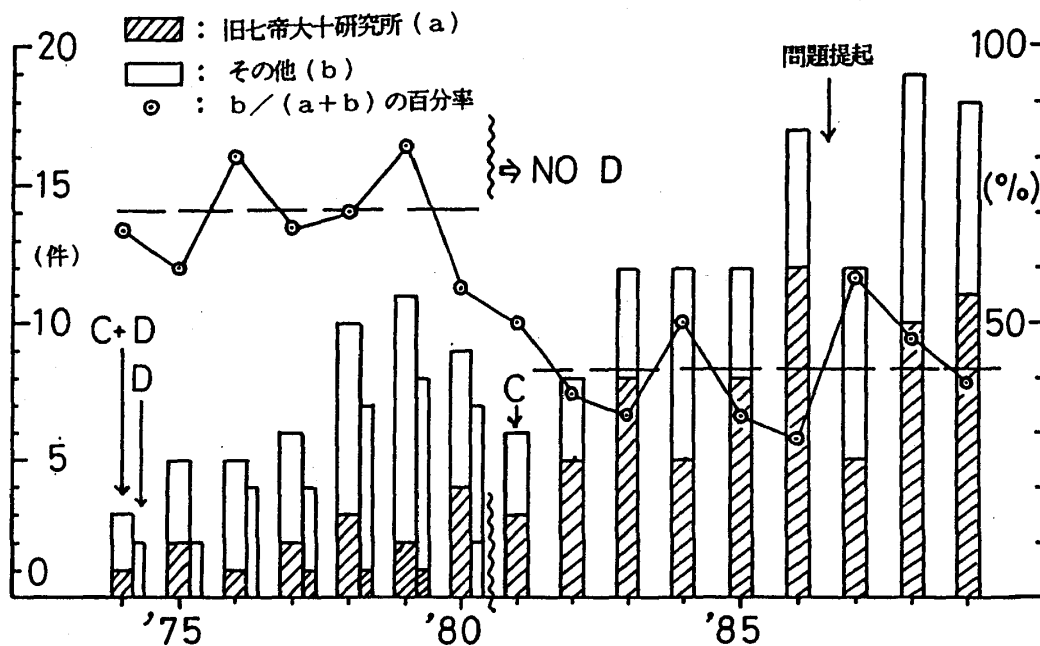


図1 素粒子論グループ研究者への科研費（一般C（+D））配分状況

2. 基研をみる視点

“条件、条件、… というのでなくもっと格調の高い話をと云われるかもしれない。それはそうであるが、残念乍ら、研究条件をまず全面に問題にせざるを得ない状況が「地方」の厳然たる現実なのである。研究者である限り誰しも“研究したいと願っている。しかし実際には多くの「地方」研究者が力を発揮できないまま眠り込まされている状況がある。これを視

表 1. 「地方」研究者の活動の一端（SG 地方大学懇談会事務局（北教大札幌分校）資料より）。

大口申し込み（5 件）

1. 「第 18 回北陸地区素粒子論グループ合宿」（新潟大 宗 博人氏 申請） 1990.5.25-27 60000 円
開催場所 金沢大学辰口共同研究センター 参加人数 65 名
特別講演 「ANYON SUPERCONDUCTIVITY」 村山 斉氏（東大理）及び 6 つの研究発表
2. 「第 3 回北東北核理論セミナー」（岩手大 西崎 滋氏 申請） 1990.6.2-3 50000 円
開催場所 岩手大学人文社会学部 参加人数 7 名
招待講演 「原子核の相対論的模型」、「The Missing Strength Problem on the Coulomb Sum Values in (e, e') and Renormalized Relativistic RPA in the $\sigma - \omega$ Model」、参加者による研究発表 5 篇
3. 「中部地区夏の学校」（静岡大 村山昭浩氏 申請） 1990.8.29-9.1 50000 円
開催場所 工学院大学富士吉田セミナー校舎 参加人数 21 名
招待講演 「二次元量子重力とストリングの非摂動効果」 川合 光氏（東大理）
4. 「四国地区セミナー」（徳島大 日置善郎氏 申請） 1990.4.3-4 50000 円
開催場所 徳島大学教養部 参加人数 14 名
講師 萩原 薫氏（KEK）、小玉英雄氏（京大教養）
5. 「九州地区素粒子論セミナー」（鹿児島大 中村昭洋氏 申請） 1990.8.19-21 50000 円
開催場所 指宿市国民休暇村 参加人数 15 名
講師 伊沢瑞夫氏（水産大）「最近の宇宙論について」、及び研究講演多数

小口申し込み（4 件）

1. 「北海道原子核理論グループ研究会」（帯広畜産大 前多修二氏 申請） 1990.8.20-23 20000 円
開催場所 大滝セミナーハウス 参加人数 20 名
講師 阿部恭久氏（基研）「高励起原子核の冷却過程」、及び研究発表
2. 「研究交流」（新潟大 浅野英樹氏 申請） 1990.3.5-7 20000 円
「非線形シグマ模型の量子化と演算子順序の問題」
新潟大 浅野英樹氏 → 北大 藤井寛治氏
3. 「三重セミナー」（三重大学 松永 守氏 申請） 1990.6.8-10 25000 円
開催場所 三重大学 参加人数 6 名
講師 沢田昭二氏（名大理）「カイラル・ソリトン模型の現状と今後」
4. 「Hadron Physics セミナー（北海道地区）」（北海道自動車短大 松田康夫氏 申請） 1990.9.7-9 20000 円
開催場所 北海道自動車短大 参加人数 22 名
特別講演 「Lattice QCD」 木村信行氏（北海道工業大学）

招待講演 「Hadron 物理学と束縛問題」 室田敏行氏（山梨大学）、及び研究交流と講演

野に入れて発言すること、これが私の話の原点である。以下、この立場から基研の将来像とかがわって4点を述べる。

(i) 共同利用研として基研の果している役割は大きい。

「地方」の恵まれない研究環境を緩和する上で共同利用研としての機能 — 各種研究会（長期、短期、モレキュール）やアトム型研究員制度 — は「地方」研究者にとって全国の研究活動への参加の場を提供してきたし、活性化の触媒的役割を果たしてきた。また、ともすれば閉じこもり孤立しがちな研究者に横のつながりを作ってゆく核としての、精神的な支えとしての役割も担ってきたと思う。今年度後半から新たな制度 — 地域スクール、ゼミ派遣、ビジター制度 — が設けられた事は大いに歓迎したい事柄である（'90年秋の学会のSG地方大懇談会は平常の2倍を越す参加で盛況、期待の大きさを物語っている）。私自身OD時代1年間基研にお世話になった。地方へ行ってからも研究界、アトム型や文献収集でしばしば利用させてもらっている。細々乍ら研究を続けられるのも基研に負うところが大きい。

(ii) 研究者人口の重心は「地方」に移っている。

これはとくに強調したい点である。SG名簿にもとづき研究者人口の推移をみたのが図2である。²⁾ 約20年間で研究者人口は~1.7倍になっているがこの殆どは「地方」での増加である（SG研究者が只1人という機関は100を越える）。現在、「地方」研究者は「中央」の2倍を越えるまでになっており、基礎物理学研究体制の大きな構成部分を占めている。この今日状況の下で(i)を考えれば共同利用研というスタイルで基研が果たす役割は益々重要になってくる。これと関連して大切な事は“行き易い（しきいが高くない）という雰囲気である。基研がそうであるのは（しきいが高いと感じる人もいるかもしれぬが）全国の研究者の総意に基づく運営を制度上保障していることと密接に関連している。出身の研究室であっても年が経つにつれ行きにくくなる。「地方」に行っても何年にもなる多くの研究者にとって気がね無く訪れられる開かれた研究所としての基研は貴重である。

(iii) 「地方」だけの問題か

「地方」の視点から基研の役割をとらえるのは何も「地方」に閉じる課題ではない。「中央」で生まれ育った研究者がいつかは「地方」に研究の場を求めざるを得ない状況は数字の上からも明かである。従って「地方」の問題は秀れて「中央」の問題でもある。「地方」で生き生きと研究できる状況を工夫してゆくこと、これは基礎物理学全体のレベルアップはもとより研究交流、人事交流という観点からも大切である。さらには研究面だけでなく教育や文化活動の面でも positive に作用するものであり、我が国の科学・文化・社会という広い視野からもとらえらるべき問題である。基研の創設は日本の学問のあり方全体を視野に入れ

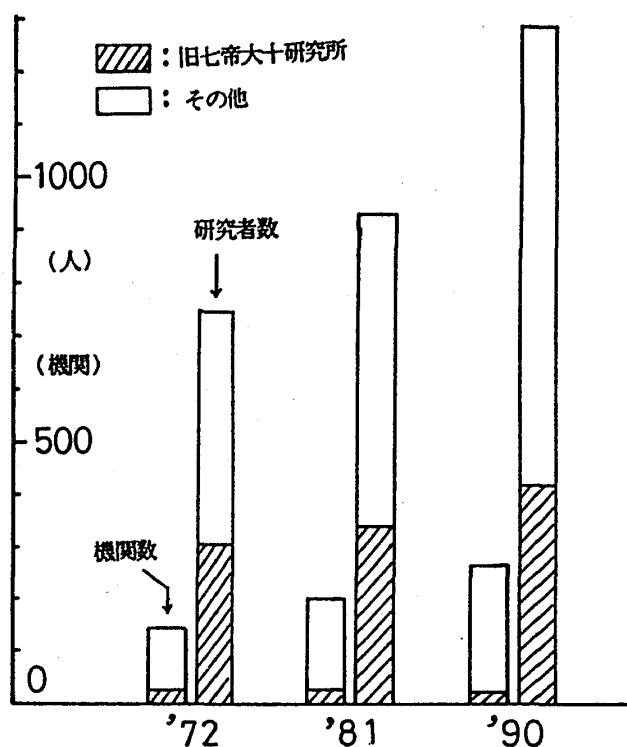


図2 素粒子論グループ研究者数、所属機関数の推移（SG懇名簿による）

たSG運動の1つの成果として結実したものと伺っている。今日、その大いなる精神を想い起こす必要があるのではないだろうか。

(iv) 共同利用研という形態は学問分野の特質に根ざしている。

ところでこうして述べてくると、基研は「地方」の為にだけ役立てばよいのか、「地方」問題が解決されたとしたら要らないのか、と反問したくなる。そこで最後に触れておきたいことは共同利用の精神と基礎物理学という学問との関連である。我々の学問分野—基礎物理学—は産業界や社会のニーズといった外因によって研究内容や方向が左右されるのではなく、その決定は研究者社会自身の手委ねられているという特徴がある（その分、陽が当たらぬという面もあるが）。これは研究の領域や学派を越えた全国の研究者の共同作業によってこそ真に適切なものとなり得る。この共同を制度面で保障し、実践（単なる意見交換ではなく）を支える場として、文字どおり全国の研究者に開かれた研究所がどうしても必要である。基研はこれを担うべく活動してきたし今後も担うべきと考える。基研の現行制度は学問分野の特質に根ざしたものであり、この為にこそ小さい研究所であり乍らも研究領域を巾広く且バランスよく配置し、領域固有の発展と同時に新しい芽や境界領域の開拓に心がけてきたものと理解している。

3. 望むこと

共同利用研の activity は所員自身の研究もさること乍ら、全国の研究活動をいかに鼓舞し支えているかという視点からとらえらるべきものである。この点で基研の果している役割をくりかえし積極的に評価したい。既に2で触れたが例えば1989年度1年間に何らかの形で基研を「共同利用」した研究者は～1000名の多きに上ると推定される（長・短期15件×（～50名）＋モレキュール4件×（～20）＋アトム15＋研究員11≒850、＋othersで～1000）。基研は正に共同利用研として「小さい巨人」の役割を果している。

「合併」に伴い今後の研究所像が論議になっている。所員固有の activity も大切であるが研究所の activity ＝所員の研究ととらえる余り、小さく閉じた研究所にはなり下がって貰いたくないものである。「新研究所」に望むことは“文字どおり全国の研究者に開かれた共同利用研としての方向で一層の充実をめざして欲しい”ということである。こらは既に述べてきた様に、基礎物理という学問の特質からも、条件に恵まれない研究者の増大と一層の格差拡大の動向からも、また、基研創立が日本の学術研究体制に果してきた「先駆」としての役割からも、強く望まれる方向である。この方向こそありきたりの研究所には無い基研のユニークさであり、真に今日的な研究所像であると思う。

参考文献

- 1) 坂東弘治、松本賢一、山田英二、「基研20周年記念シンポジウム記録」(1973),121.
- 2) もう少し詳しくは、
SG地方大懇談会事務局（岩手大・人社）、素粒子論研究 77(1988),78.

討論

佐々木 節：柳田さんの話との関連で相矛盾するようなことをコメントされたように思われますが、今の話で柳田さんがおっしゃったことと両立しないような部分はないように思うんですが。現実にはできるんじゃないかと言う気がするが。若手の方や中堅の方でも三ヶ月行きたいと

高塚：柳田さんは批判点として、魅力がないんだと言われた。

佐々木 節：大きくなったことは一つのポイントで、今までと同じことではなくプラスαの事ができると考えていいんじゃないか。

高塚：これからどうなるかと言う問題じゃなくて、現在基研が果たしてきた現状について、私は共同利用が果たした役割を積極的に評価したい。